

速報展 発掘された鈴鹿2000

&

企画展 中勢バイパス関連遺跡展

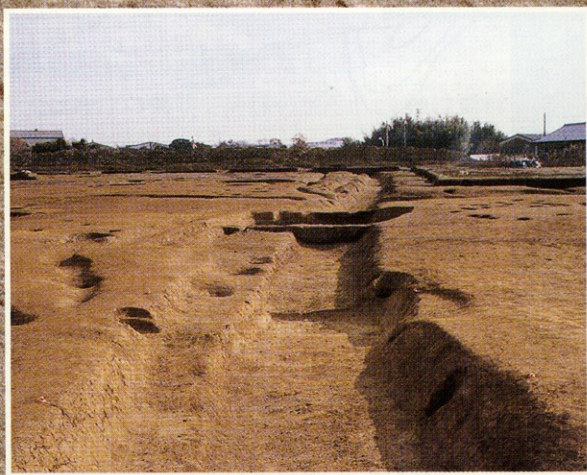
発掘された鈴鹿4



伊勢国府跡政庁西 南北溝



伊勢国分寺跡講堂瓦出土状況



梅田遺跡大溝

2001.3.24~2001.7.1



鈴鹿市考古博物館

Suzuka Municipal Museum of Archaeology

速報展 発掘された鈴鹿2000

伊勢国分寺跡(23・24次) Ise Kokubun-ji Temple Site

鈴鹿市国分町字堂跡 調査原因：学術調査

調査期間：(23次) 2月4日～3月31日・(24次) 5月8日～9月19日

(23次)22次調査で基壇の東西規模が約33mであることが明らかとなった講堂の南北規模を確認するため、講堂の北西・北辺・南西に調査区を設けました。その結果、北西部分からは地覆状の埴列や瓦の堆積が確認され、南西部からは瓦埴列と瓦の堆積が確認されました。北辺では中央部の遺構の状況を精査しましたが、瓦埴列や階段等の痕跡は確認できませんでした。

(24次)講堂の補足的な調査と金堂の

確認を試みました。

講堂では北西・南西部の精査と南辺部に調査区を設けました。北西部では列に接して、平瓦や軒丸瓦・軒平瓦が落下状況を留めて出土しました。南西部及び南辺では埴の代わりに瓦が多く用いられていました。これら基壇周囲の瓦埴列は基壇外装の基底部で、造営当初は埴積みであったものが、後の改修時に瓦などで補われたものと思われます。講堂基壇の南北規模は約21mであったことがわかりました。

金堂は講堂南へ芯々で約40数m離れて見つかりました。基壇の地上部分は全く留めておらず、基壇地下の地盤改良(基礎地形)のみが残存していました。基礎地形の範囲から東西約28m、

南北約23mの基壇があったことが想定されます。基礎地形の上層はより新しい時期の整地層によって壊されているため、2時期の変遷が窺えます。南辺で見つかった延石状の埴列や西辺の埴列は新しい時期の基壇に伴うものと考えられます。

これまでの講堂・金堂の確認調査によって、講堂では基壇外装の積み直しが、金堂では基壇の地下部分にまでも達するような改変が明らかとなりました。具体的な時期についてははっきりしませんが、金堂基壇の周囲における溝から出土した土器とⅡ期の遺構との関係から、創建からそれほど時を隔てていない8世紀末頃には大規模な工事が想定できます。



講堂基壇南西隅



金堂基壇南西隅



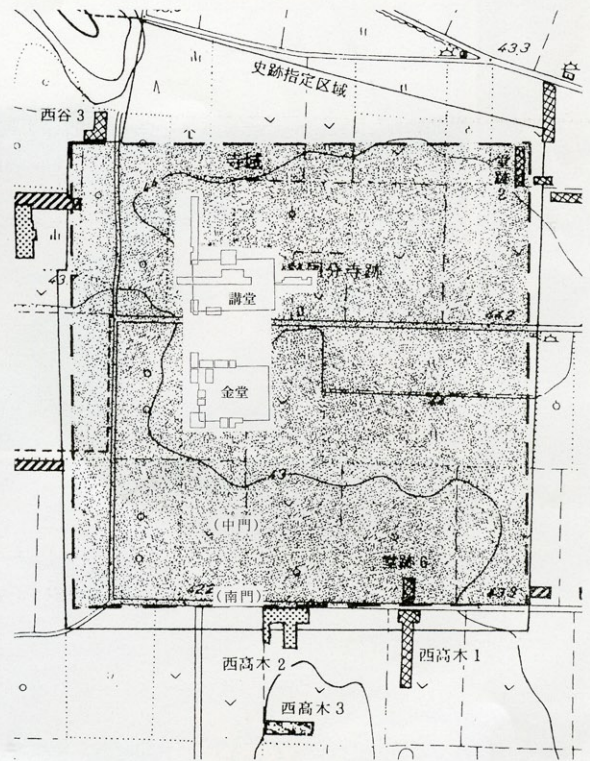
金堂基礎地形版築



軒瓦



方形埴



発掘調査区 (1:3,000)

伊勢国府跡(12次) Ise Kokufu (provincial office) Site

鈴鹿市広瀬町字中起・荒子 調査原因：学術調査 調査期間：10月1日～平成13年3月11日

9年目第12次調査となった今回は、政庁の西・北西・北東において調査区を設けました。

政庁の西では南北溝が2条見つかりました。東(内)側の溝は幅約2.7m、西(外)側の溝は幅約2.1mで、深さは70cm前後です。2条の溝は約3.6m離れており、溝に挟まれた部分から黄褐色の土が流れ込んでいる様子が確認されました。おそらく土塁か築地塀があったのでしょうか。溝の中からは須恵器小壺や瓦類が少量出土しました。

これら2条の溝と過去の試掘調査などで見つかった溝をつなぎ合わせると、南北約100m・東西約70mに及ぶ区画が復原できます。その内部には第11次調査で見つかった建物が含まれます。政庁に匹敵する格式の高い区画が、政庁の西隣にあったことが想定できます。政庁の機能を補完・拡充するために設けられたものでしょう。

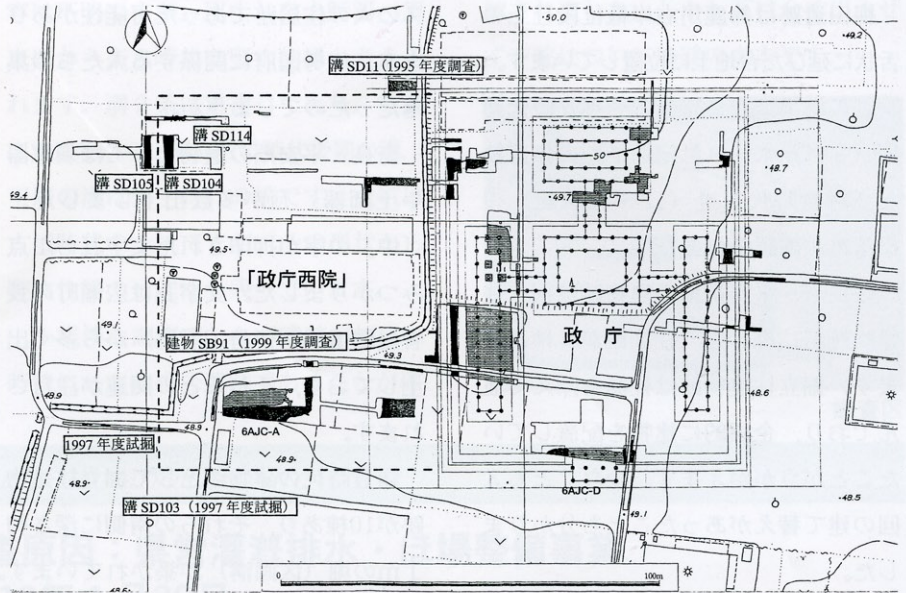
伊勢国府とよく似た建物配置を有する近江国府では政庁の東側で同様の区画が見つかったほか、三河でも同様の区画が想定されています。

政庁の北西では遺構は全く確認されず、瓦片がわずかに出土したのみです。

政庁の北東では竪穴住居・掘立柱建物・溝が確認されました。

竪穴住居は東西5m・南北6mで、東辺にかまどを有します。北辺及び南辺は座標方位に一致しますが、東辺・西辺は東に振れます。土師器・須恵器・鬼瓦などが出土しました。8世紀後半の埋没が考えられます。

竪穴住居の南からは2時期の変遷が認められる掘立柱建物が見つかりました。1棟は梁行2間・桁行7間、もう



政庁西調査区(1:2,000)



掘立柱建物



竪穴住居

1棟は梁行4間・桁行7間の東西棟建物で、いずれも東西約21mに及ぶ大型のもので、平面配置が正方位に一致する政庁やその他の建物と異なり、大きく東に振れます。時期は8世紀終わりから9世紀初めころのものと考えられます。さらにそれらの南西には性格不明の柱列があります。掘立柱建物に付属するものなのか、別の建物なのか、はっきりしません。

これらの建物は政庁に極めて隣接しますが、棟方向や柱痕の大きさから国府の中枢に関わる建物とは考えられず、長者屋敷遺跡における国府の存続期間のうちでも末期に設けられた仮設的な建物と思われます。



須恵器壺



土師器蓋

調査区東で確認された溝は幅14m・深さ90cmの南北溝です。政庁の外郭を構成するものかもしれません。

鈴鹿市国府町字梅田 調査原因：ほ場整備
調査期間：4月17日～平成13年1月19日

梅田遺跡は鈴鹿川右岸低位段丘上の舌状に延びた台地上に位置しています。調査の結果、奈良時代末～平安時代初期（8世紀末～9世紀前半）の集落跡と、鎌倉時代前半（12～13世紀）の集落跡が確認されました。

奈良末～平安初期の建物跡は掘立柱建物跡が12棟、竪穴住居跡が4棟あります。掘立柱建物跡は柱筋を揃えて並んでおり、企画的に建物を配置していたことがうかがえます。少なくとも3回の建て替えがあったことも分かりました。

庇をもつ建物跡が2棟確認されました。当時庇をもった建物は珍しく、高い階級の人の邸宅などにしかありません。したがって、この遺跡から出てきた庇付きの建物跡もある程度高いクラ

スの人の住居跡であった可能性があります。伊勢国府に関係する人たちの集落だったのでしょうか。

奈良・平安期の遺物としては須恵器や土師器、瓦が多数出土しました。

「中」の字が押印された文字瓦も1点みつけられました。文字瓦は広瀬町の長者屋敷遺跡（伊勢国府跡）から多く出土しており、それらとの関連が注目されます。

鎌倉時代の建物跡として掘立柱建物跡が10棟あり、それらの南側に深さ約1mの堀（区画溝）が築かれています。建物跡は複雑に切り合っており、何度も建て替えが行われたようです。建物跡の中には5間×5間、広さ約112㎡

（約34坪）と、当時としては非常に大きな規模を持つものもあります。

鎌倉時代の遺物としては山茶碗や常滑焼の甕などが非常に多く出土しました。山茶碗の中には墨で「上」「里」などの文字が書かれたものやもみじの絵が描かれたものもあります。青磁や白磁など中国からの輸入品が多いこともこの遺跡の特徴の1つです。



全景（上が北）



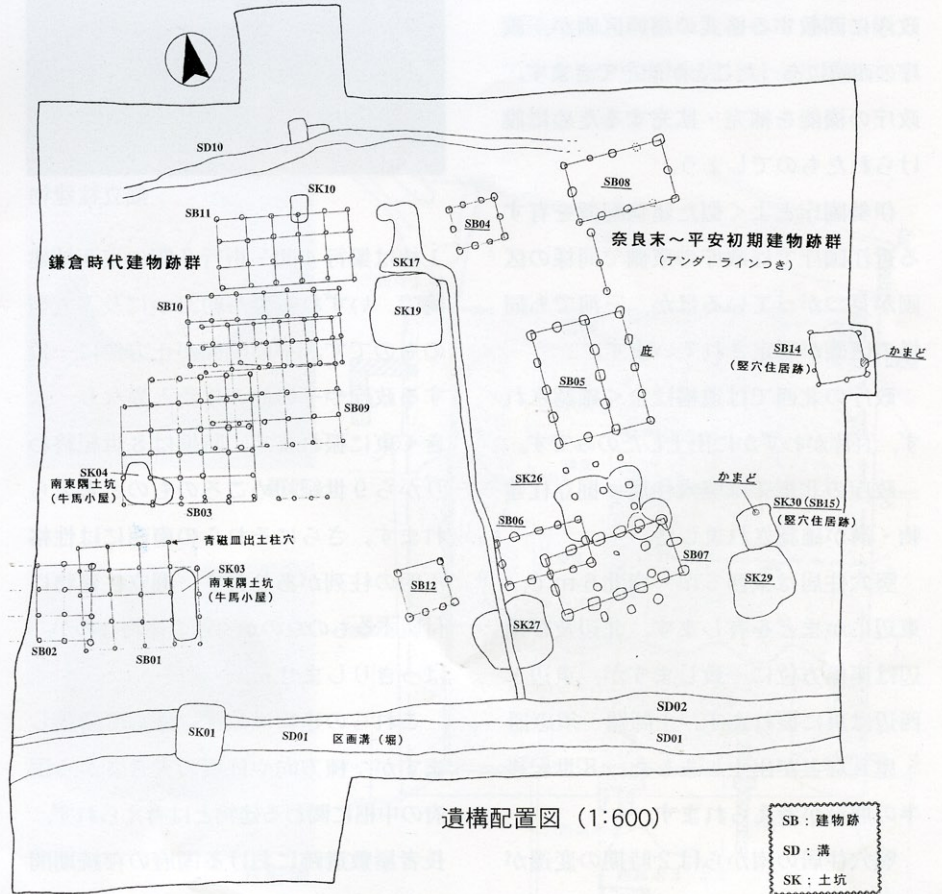
掘立柱建物群



墨書山茶碗



青磁壺



遺構配置図 (1:600)

SB：建物跡
SD：溝
SK：土坑

天王屋敷遺跡 Tenno-yashiki Site

鈴鹿市岸岡町字石塚 調査原因：個人住宅

調査期間：7月31日～8月3日

天王屋敷遺跡は、鈴鹿医療大学の南に広がる集落遺跡です。7世紀代に遡る古瓦の散布が見られることから白鳳寺院の可能性のある遺跡としても知られていますが、寺院の正確な位置は不明のままです。

調査の結果、竪穴住居1棟・溝2条・土坑1基・柱穴が検出されました。竪穴住居は調査区外に延びるため全

容は不明ですが、出土した土師器・須恵器から奈良時代の竪穴住居と考えられます。溝2条は重複しており、その出土遺物から上層は古墳時代後期の溝、下層の溝は弥生時代の溝です。土坑は古墳時代の土坑ですが、その形状から竪穴住居の可能性も残っています。

小規模な調査でしたが遺跡が幅広い時代にわたる複合遺跡であることが確

認されました。しかし瓦は全く出土せず寺院については謎のままです。



調査区

河田宮ノ北遺跡 Kouda-miyanokita Site

鈴鹿市河田町字宮ノ北 調査原因：県営灌漑排水・ほ場整備事業

調査期間：11月13日～平成13年1月30日

調査主体：三重県埋蔵文化財センター

河田宮ノ北遺跡は河田町の集落の北部、式内川神社の北に広がる水田で、県の事業に伴い新たに発見された遺跡です。この川神社と周囲の集落を中心に広がると考えられます。

調査の結果、古墳時代後期（5～6世紀）から奈良時代（8世紀）にかけての川の跡、中世以降の水田の跡などが確認されました。そのうち川の跡の

5世紀末から6世紀前半にかけての層からは土師器・須恵器などの土器と木製品が大量に出土しました。出土した木製品は土木作業や耕作用に使う鋤・鍬、農産物の加工に使用する竪杵・横槌、家の柱など建築部材、木を薄く削いだもので編んだ笊のようなものなどバラエティーに富んでいます。また、頭椎大刀の把頭部分、刀形・鍬形など

の武器を象ったもの、団扇のような形をした翳形のものなど祭祀に使用されたと思われる木製品も出土しました。

鈴鹿市内の遺跡で古墳時代の木製品がこれほど大量にまとまって出土したのは河田宮ノ北遺跡が初めてです。



作業風景



木製品出土状況



土器出土状況

企画展 中勢バイパス関連遺跡展

発掘された鈴鹿4

開催にあたって

中勢国道は鈴鹿市西玉垣町から三雲町までの33.8kmを結び、現在の国道23号線の交通緩和と沿線の土地活用を図って計画されました。市内では稲生町～御園町に至る第6工区の事業が進められ、一部が平成5年10月に供用開始

されています。この工事に先立ち、平成3～6年にかけて埋蔵文化財の発掘調査が実施され、その範囲の遺跡は消滅しましたが、その成果はすでに報告書として公刊されています。

しかし、出土遺物等については市民

の皆様に一括してご覧頂く機会がありませんでしたので、今回三重県埋蔵文化財センターの御理解と御協力を得て公開することにいたしました。

高井A遺跡 Takai A Site

鈴鹿市御園町字高井

調査期間：(1次)平成7年9月5日～平成8年3月6日、(2次)平成8年5月13日～5月23日

遺跡は伊勢鉄道「徳田」駅の西北西約1kmに位置します。鈴鹿西南部丘陵の東端の裾部に立地し東側には中ノ川流域の平野が広がっています。第1次調査では4,100㎡、2次調査では450㎡が調査されました。

調査の結果、検出された遺構は調査区中央を北から南に流れる自然の谷川(流路)2条と合計22棟の掘立柱建物と溝そして土坑です。

この流路からは弥生時代から平安時代までの遺物が出土して長い間この地に住まう人々の用排水として利用されていたことが伺えます。

掘立柱建物は大きく2時期に分けられ飛鳥～奈良時代のものが8棟、平安時代末～鎌倉時代のものが14棟確認されました。これらの建物には特に大型のものではなく一般的な集落の住居と考えられます。

出土した遺物には弥生時代中期の壺・石鏃、古墳時代後期～奈良時代の須恵器・土師器、平安時代では灰釉陶器・りよくゆう緑釉陶器、鎌倉時代の山茶碗などがあり、各時期の生活用品がまとめて出土し

ています。

この遺跡で注目されるのは、一般集落とみられるにも関わらず墨書のある土器が数多く出土したことです。墨書が行われているのは主に奈良時代の須恵器で「井於」「井口」「井」「船」などの文字が見られ、市内では最もまとまった墨書土器の資料となりました。

特に「井」の字が用いられ、このムラの水源と考えられる流路を中心に出土していることから、水に関する何らかの祭祀に用いられたうつわの可能性が考えられています。



掘立柱建物群



円筒形須恵器



墨書土器



全景 (上が北西)

南谷遺跡 Minamidani Site

鈴鹿市稲生町字南谷

調査期間：平成4年4月13日～6月6日

南谷遺跡は、伊勢鉄道「鈴鹿サーキット稲生」駅の南西約1.5kmに位置します。東に中ノ川流域の平野を望む丘陵上に位置しています。標高は約34mで、平地からの比高は25mあります。

今回の調査では、平野に突き出す尾根1条の全面が調査されました。その結果、弥生時代後期の竪穴住居1棟、土坑1基と溝3条が検出されました。

注目される遺構は尾根と直交して掘

られた溝3条です。丘陵端部に近い2条の溝の断面は鋭いV字状を呈しています。幅は広い部分で2m以上、深さは1m近くあります。当時はさらに深く、幅も広がったはずで、防御用の堀として平地からの侵入を防ぐために掘られたとみられます。また、竪穴住居近くの溝からは市内で初めての弥生時代の鉄鏃^{てつぞく}2个体が出土しました。

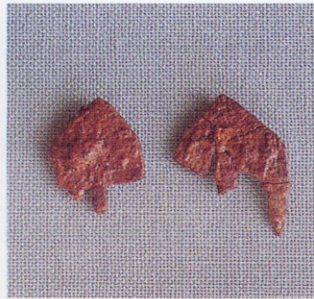
弥生時代には、丘の上に砦のように

営まれた高地性集落や、周囲に堀や土塁を巡らせた環濠(囲廓)集落など防御に適したムラが各地に営まれ、大型石鏃、石剣などの武器が発達します。これは当時の社会が水利や領域の統合を巡り時に戦闘が勃発するような緊迫した情勢にあったことを示しています。

この遺跡もこのような争いに備えて防備を固めた高地性集落のひとつに位置づけられるようです。



全景



鉄鏃



溝



遺跡位置図 (1:100,000)

「この地図は、国土地理院発行の1/50,000地形図「四日市」ほか3面を使用したものです。」

鈴鹿市稲生町字中尾

調査期間：平成4年4月13日～7月4日



全景

伊勢鉄道「鈴鹿サーキット^{いのう}稲生」駅の西約500mに所在します。浸食によって南北に長い島状に切り離された丘陵の西側斜面に立地しています。

かねてから須恵器等が採集されていたため須恵器窯跡と考えられ稲生I-4号と命名されていました。

発掘調査では、西向き斜面の大部分約2,100㎡を調査しました。その結果、予想に反し窯跡に関する遺構は発見されませんでした。古墳時代後期の竪穴住居33棟が検出されました。地形からみて古墳時代の集落の大部分を掘りあげたこととなります。

竪穴住居はほぼ正方形で、最大のもので一辺5.7m、最小のもので3.5m×3mです。東または北側にかまどを持っていて、トンネル状の煙道が残っているものもありました。竪穴住居は、各竪穴から比較的多く出土した須恵器や土師器などの土器類から5世紀の後半から6世紀の前半にかけて営まれたようです。



人(獣?)形土製品



玉類

また床面近くの土をすべて水洗いしたところたくさんの滑石・ガラス製の玉類が見つかり個々の住居でも玉を使った祭祀が行われていたようです。

これら竪穴住居は他に空き地があるにも関わらず、同一場所で重複し、あるいは少しずつずらして3回以上建て替えられています。このことからすでに個々の宅地の考え方があったことも推定できます。

調査区中央やや南よりに谷状の大溝があり、ここからは多くの須恵器のほかミニチュアの土師器や人(獣?)形土製品などがまとまって出土しここでムラの祭祀が行われていたことが推定されます。

かまどや須恵器の使用そして玉を使った住居内での祭祀は、5世紀代に徐々に開始され、6世紀代に一般化します。この稲生遺跡のムラはそれら新しい技術や流行をいち早く取り入れているよ



須恵器



北区竪穴住居群



南区谷状地形

うです。

周囲には鈴鹿サーキット建設時に発掘調査された稲生I-1・2号窯跡など5世紀後半から生産が開始された稲生窯跡群が分布することからみて、この稲生遺跡は須恵器生産技術を携えて畿内方面から新たに移住してきた人々のムラなのかもしれません。